

『荒野の試み』(要旨)

聖書箇所：マタイ 4:1-11

「試練→神の手の中で、神がよく分からなくなる出来事が起こっている」(東日本大震災国際シンポジウム講演 2022.2.7.)

[1] 「試み」(誘惑)とは何か

主イエスがシバテスマのヨハネから洗礼を受け公生涯の最初に向き合われたのが悪魔の「試み」(誘惑)でした(マタイ 4:1)。

悪魔は「試みる者」(4:1)、「誘惑する者」(I テカコケ 3:5)と呼ばれます。信仰者を様々な苦難にあわせることで神に対する不信を抱かせて罪に誘います。「試み」それ自体は決して有難いものではなく、できれば避けたいものです。しかし人は「試み」を通して、信仰か不信仰か、善か悪かの決断に直面させられます。信仰者は「試み」を通して訓練されるのです。

イエスは、3回に及ぶ悪魔の「試み」と対峙されました。もちろん主イエスが経験された「試み」はこの3回だけではありません(参照:ルカ 4:13)。イエスは人が経験する全ての「試み」を経験されました。空腹や喉の渇き、肉体の疲労、日々の心の浮き沈みや対人関係による悩み等々(参照:ペル 4:15)。父なる神に「私の愛する子」(3:17)と呼ばれた「神の子」(4:3)でさえ私たちと同様に「試み」を受けました。あなたに落ち度があるから「試み」にあうわけではありません。

[2] 三つの「試み」

主イエスは荒野で40日間の断食をしました。空腹を覚えたところに「試みる者」(悪魔)が近づきました(4:2-3)。

最初の「試み」は「これらの石がパンになるように命じなさい…」(3)でした。「神の子」が石をパンに変えることなど何の造作もないことです。一切れのパンを盗んだがために投獄されたジャンヴァルジャン(レ・ミゼラブル)を思えば、「パン」を侮ることなどできません。人が生きていくために「パン」(食物)は必要です。それだけ大切なものであるゆえに、人はパンそのものに期待をおき、パンを与えて下さるお方を忘れてしまう傾向があるのでしょうか。主イエスは「人は…神の口から出る一つ一つのことばで生きる」(4)と答え「試み」を退けました。

次の「試み」は、「神の子」として、特別な存

在であることを証明せよというものでした。十字架上のイエスに「今、救い出してもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから」(マタイ 27:43)という場面を思い出させます。私たちは「神よ、私を愛しているのなら、今すぐに…すべきだ!」と神を試みてしまいやすい者です(参照:申命記 6:16、I コリト 10:9)。しかし主イエスは、「あなたの神である主を試みてはならない」(マタイ 4:7)と神に従順に信頼したのです。

最後の「試み」は、悪魔がイエスに「この世のすべての王国」(4:8)を与えるというものでした。悪魔は「この世を支配する者」(ヨハネ 12:31)、「この世の神」(II コリト 4:4)と呼ばれ、神に敵対した人間の生き方を取り仕切っています。かつて神の救いを経験したイスラエルの民は、この世の現実の中で上手く生き残り、近隣諸国との関わりにおいて利益を得るため「主にのみ仕える」ことから離れました(参照:申命記 6:10-15)。しかし主イエスは「あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい」(4:10)と悪魔の「試み」を退けたのでした。

[3] 「試み」に打ち勝つ秘訣

悪魔はイエスに救い主であるなら、荒野に食物をもたらし、天の御使いに従えて、この世の統治者となるべきだと「試み」ました。それは一見、今の課題に対処するために有効な提案に見えました。それに対してイエスは神のみことばをもって「試み」を退けました。このイエスの姿に「試み」に打ち勝つ秘訣が示されているのです(参照:ペリ 6:10-18)。

▷悪魔の試みに対して、賢げに対処しようとするのではなく、愚直にみことばにより頼むこと、それが「試み」に打ち勝つ秘訣です。

「この世はみな 神の世界、
悪魔の力が世に満ちても、わが心に迷いはなし。
主こそがこの世を治められる。」
(教会福音讃美歌 491 番 3 節)

